

理学部 基礎科目について（2012・13年度入学者に適用）

【2011年度以前の入学者は、2011年度履修要覧を参照すること（神奈川大学ホームページから閲覧できます）】

理学部基礎科目は「F Y S」,「外国語科目（英語）」,「教養系科目Ⅰ群・Ⅱ群」および「キャリア形成科目」から構成される。「教養系科目Ⅰ群・Ⅱ群」については卒業要件を満たすように教育課程表を参照して履修すること。ここでは特に、「F Y S」,「外国語科目（英語）」,教養系科目Ⅱ群の「英語以外の外国語」と「健康科学」および「キャリア形成科目」の履修について述べる。

〈F Y S〉

F Y Sは全学共通の初年次教育科目（必修）です。F Y Sとは、ファースト・イヤー・セミナー（First Year Seminar）の略で、新入学生（1年次生）は少人数のクラスに分かれ、“大学への入門”をセミナー（演習）形式で学びます。本学では、このF Y Sを通して新入学生が大学での学修により早く適応できるようにサポートします。

新入学生のみなさんは、この科目の履修を通して「読み、書き、調べ、問題を発見し、自分の考えを発表し討論でき、自分の責任のもとで行動できる」大学生としての資質を身につけ、積極的に学修に取り組む姿勢を修得してください。

具体的には、以下のような能力を身につけた学生の育成をめざします。

〔大学で学ぶための視点〕

- （１） 大学で学ぶことの意味を理解し、自分を客観視することができる。
- （２） 事象や既存の理論に対して「問題」を発見し、また疑問を提示することができる。
- （３） 自らの能力を自己評価でき、新たな達成目標を設定することができる。

〔大学で学ぶための方法〕

- （４） 大学の組織と沿革を知り、また学修支援システムを自立的、継続的、多面的に利用できる。
- （５） 教育課程を理解し、４年間の学修計画をたてることができる。
- （６） 図書館の利用により、独自に文献や資料等を検索または収集できる。
- （７） 既存の文書を指示された要件に従って要約・再構成でき、また、完成度の高いレポートや小論文を所定の期限までに完成できる。
- （８） グループ学習に際しては、協調性をもって主体的に参画することができ、また意見を述べることができる。
- （９） プレゼンテーションに際しては、自ら資料を作成し、論点を整理し、所要時間内に口頭発表ができる。

授業回数は、前期（半期）15回とし、おおむね以下のような内容と順序で行われます。これにより、大学生に求められる一般常識や態度と、大学で学ぶための基礎的技法をバランスよく学びます。

1 年 次 ・ 第 1 セ メ ス タ ー	第1週目	第Ⅰ編 大学生に求められる一般常識や態度を身につける	第1章 大学で学ぶことの意味を理解する① －自ら積極的、主体的に取り組む－
	第2週目		第2章 大学で学ぶことの意味を理解する② －疑問を抱き、「問題の所在」を発見する－
	第3週目		第3章 大学で学ぶことの意味を理解する③ －神大の歴史・沿革を学び、大学生としてのモラルを理解する－
	第4週目	第Ⅱ編 大学で学ぶための基礎的技法を身につける	第4章 授業への取り組み① －自分にとって役立つノート－
	第5週目		第5章 授業への取り組み② －文献資料（図書、新聞、雑誌など）を読む－
	第6週目		第6章 授業への取り組み③ －情報探索と問題発見 図書館利用ガイダンス－
	第7週目		第7章 授業への取り組み④ －情報探索と問題発見 情報活用能力を身につける－

1 年 次 ・ 第 1 セ メ ス タ ー	第8週目		第8章 授業への取り組み⑤ －問題発見から問題の解決に向けて仮説を設定し，検証する－
	第9週目		第9章 授業への取り組み⑥ －レポートや小論文の作成－
	第10週目		第10章 授業への取り組み⑦ －レポートや小論文の検証－
	第11週目	第Ⅲ編 大学で学ぶための視点と方法を身につける	第11章 プレゼンテーションを準備する① －意義と目的－
	第12週目		第12章 プレゼンテーションを準備する② －テーマ設定とレジュメ作成－
	第13週目		第13章 プレゼンテーションを実施する① －自分の考えを人前で話す－
	第14週目		第14章 プレゼンテーションを実施する② －相互に評価・批評をする－
	第15週目		第15章 まとめ －F Y Sで学んだことと，これから大学で学んでいくべきことを話し合う－

各回の具体的な授業内容は、『F Y S資料&ワークシート集－大学で学ぶための視点と方法を身につける－』に記載してあります。

成績評価は，授業に参加する姿勢30%，小テストまたはレポート等の内容30%，プレゼンテーション等の内容40%として行います。

〈外国語科目〉

1. 外国語科目の履修

言語の運用能力は、将来どのような分野に進もうと、身に付けた専門知識や専門技術を十分に活かして成果を上げるための基本となる重要な能力の一つである。言語は人類の文化の基礎であるから、将来社会人として人類の歴史と文化を継承して社会で活躍するために言語の運用能力を鍛えておくことが極めて重要である。しかも、現代のように国際化の進んだ社会では、国語（自国語）と外国語の両方を操る能力を養っておくのが望ましい。文化の根底を成す言語を出来るだけ広く深く学んで人類の文化の一般性と民族の文化の特殊性について理解を深めておくことは、将来の活動の源泉となる教養の奥行を深めることに繋がるからである。

理学部では、言語のこのような重要性を考慮し、基本科目から専攻科目を通してむしろ科目区分に捕われず、1年次から3年次に至る語学とその関連科目を「語学科目」として位置づけて、様々な語学科目を含めて言語運用能力の養成と向上を図る教育課程を提供している。国際語として重要性の高い英語を第一外国語として必修科目に置いているが、英語以外の外国語も第二外国語として履修することが出来るような仕組みになっている。

2. 外国語科目一覧

理学部の語学科目については、次表のとおりである。学科によって履修要件に違いがあるので注意すること。

理学部外国語科目

卒業要件単位	科目	単位	科目区分	標準履修年次	履修要件
4単位 (選択必修) ※理学部共通	上級英語Ⅰ	2	基礎(外国語)	1前	
	上級英語Ⅱ	2	基礎(外国語)	1後	
	中級英語Ⅰ	2	基礎(外国語)	1前	
	中級英語Ⅱ	2	基礎(外国語)	1後	
	初級英語Ⅰ	2	基礎(外国語)	1前	
	初級英語Ⅱ	2	基礎(外国語)	1後	
	基礎英語Ⅰ	2	基礎(外国語)	1前	
	基礎英語Ⅱ	2	基礎(外国語)	1後	
	日本語Ⅰ	2	基礎(外国語)	1前	#
	日本語Ⅱ	2	基礎(外国語)	1後	#
4単位 ※情報科学科 (選択必修) 他は選択科目	上級英語Ⅲ	2	基礎(教養系)	2前	※
	上級英語Ⅳ	2	基礎(教養系)	2後	※
	中級英語Ⅲ	2	基礎(教養系)	2前	※
	中級英語Ⅳ	2	基礎(教養系)	2後	※
	初級英語Ⅲ	2	基礎(教養系)	2前	※
	初級英語Ⅳ	2	基礎(教養系)	2後	※
	基礎英語Ⅲ	2	基礎(教養系)	2前	※
	基礎英語Ⅳ	2	基礎(教養系)	2後	※
	日本語Ⅲ	2	基礎(教養系)	2前	#
	日本語Ⅳ	2	基礎(教養系)	2後	#
	科学技術英語Ⅰ	2	専攻C群	2前	
	科学技術英語Ⅱ	2	専攻C群	2後	
選択科目	ドイツ語Ⅰ	2	基礎(教養系)	1前	
	ドイツ語Ⅱ	2	基礎(教養系)	1後	
	ドイツ語Ⅲ	2	基礎(教養系)	2前	
	ドイツ語Ⅳ	2	基礎(教養系)	2後	
	フランス語Ⅰ	2	基礎(教養系)	1前	
	フランス語Ⅱ	2	基礎(教養系)	1後	
	フランス語Ⅲ	2	基礎(教養系)	2前	
	フランス語Ⅳ	2	基礎(教養系)	2後	
	スペイン語Ⅰ	2	基礎(教養系)	1前	
	スペイン語Ⅱ	2	基礎(教養系)	1後	
	スペイン語Ⅲ	2	基礎(教養系)	2前	

スペイン語Ⅳ	2	基礎（教養系）	2 後	
中国語Ⅰ	2	基礎（教養系）	1 前	
中国語Ⅱ	2	基礎（教養系）	1 後	
中国語Ⅲ	2	基礎（教養系）	2 前	
中国語Ⅳ	2	基礎（教養系）	2 後	
<技能資格>	2	認定科目		☆

選択必修の4単位は、上級英語Ⅰ・Ⅱ，中級英語Ⅰ・Ⅱ，初級英語Ⅰ・Ⅱ，基礎英語Ⅰ・Ⅱのうち，ⅠとⅡを組み合わせた4単位とする。

※ 情報科学科学生は，上記の英語科目4単位に加え，教養系科目の上級英語Ⅲ，中級英語Ⅲ，初級英語Ⅲ，基礎英語Ⅲ，又は専攻科目C群の科学技術英語Ⅰのいずれか2単位と，教養系科目の上級英語Ⅳ，中級英語Ⅳ，初級英語Ⅳ，基礎英語Ⅳ，又は専攻科目C群の科学技術英語Ⅱのいずれか2単位の単位をさらに修得しなければならない。

外国人留学生および外国高等学校在学経験者を対象とする。日本語は，ひとクラスの開講である。日本語Ⅰ（月・火）とⅢ（水・金）は前期に開講する。日本語Ⅱ（月・火）とⅣ（水・金）は後期に開講する。

☆ 「各種検定試験合格者の単位認定に関する取扱規程」によって認定された単位。

1年次は，全学生が卒業要件単位として英語科目を4単位履修しなければならないが，各学期の前に実施されるプレイスメントテストの成績により所属するクラスが指定される。従って前期は中級英語Ⅰ，後期は上級英語Ⅱといった様に，前後期で履修科目のレベルが変わる場合がある。レベルは異なっても，Ⅰ・Ⅱの組み合わせで4単位修得すれば良い。成績証明書には各レベル名が明記されるので，学生諸君には，より上位レベルの科目履修と単位修得の努力が望まれる。

〈英語以外の外国語の履修方法〉

1. 英語以外の外国語の履修方法

基礎科目の教養系科目のなかに、英語以外の外国語として、ドイツ語・フランス語・スペイン語および中国語が設けられている。

現在の文化的、政治的な国際状況のもとで、英語はもとより、それ以外の外国語を身につける必要がたかまっていることは、いまさらいうまでもない。諸君は今後の活動のさまざまな場で、そのことを痛感させられる機会が、ますますふえることだろう。

(1) ドイツ語・フランス語・スペイン語および中国語の履修方法

① ドイツ語Ⅰ・フランス語Ⅰ・スペイン語Ⅰおよび中国語Ⅰ（１年次前期配当 選択１科目 ２単位）

② ドイツ語Ⅱ・フランス語Ⅱ・スペイン語Ⅱおよび中国語Ⅱ（１年次後期配当 選択１科目 ２単位）

それぞれの外国語を基礎から学ぶ科目で、前・後期それぞれ週２回の講義Ⅰ・Ⅱを履修し、単位は計４単位である。語学にかぎらず、あらゆる学問、スポーツ、芸術、その他一般において、基礎をしっかりと身につけなければ、いずれは行き詰まる。そのことは肝に銘じてもらいたい。

これらの講義では、それぞれの言語の文法を学び、骨組みを知り、文章講読によってその肉付けをする。

なお、四ヶ国語とも、Ⅰ・Ⅱについて、複数クラス設けられており、授業時間割表のなかで組み合わせが指定されている。しかし、基本的には組み合わせ自由となっているので、時間割と異なる組み合わせの履修を希望する場合は、教務課に相談すること。

③ ドイツ語Ⅲ・フランス語Ⅲ・スペイン語Ⅲおよび中国語Ⅲ（２年次前期配当 選択１科目 ２単位）

④ ドイツ語Ⅳ・フランス語Ⅳ・スペイン語Ⅳおよび中国語Ⅳ（２年次後期配当 選択１科目 ２単位）

１年次で当該外国語のⅠ・Ⅱを履修済みで、同一外国語にさらに精通するため継続して学ぼうとする諸君のために、Ⅲ・Ⅳ（それぞれ週２回、計４単位）が設けられている。また、何らかの理由で履修できなかった場合には、後期開講のⅠ・Ⅱおよび前期開講のⅢ・Ⅳもあるので、それらの履修も勧める。

各外国語のⅠ・Ⅱで修得した知識と能力を大いに活用し発展させながら運用能力をいっそう高める学修を行うために設けられた科目である。

当該外国語Ⅰ・Ⅱを履修し計４単位を修得した者でなければ、そのⅢ・Ⅳを履修することはできない。

なお、当該外国語Ⅲ・Ⅳの両方を履修することが望ましいが、どちらか一方だけでもよい。その場合、Ⅲ・Ⅳの講義要項を熟読して、自分の関心と目的にそって選択履修をすること。

⑤ 上級ドイツ語・上級フランス語・上級スペイン語および上級中国語

さらに継続して語学能力を高めたい場合、下記に述べる経営学部開設されている上級Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの履修を薦める。各言語いずれも６単位以上修得しておれば履修可能である。

(2) ドイツ語・フランス語・スペイン語および中国語の既習者の履修方法

ドイツ語・フランス語・スペイン語および中国語のいずれかについて、高等学校その他で既習の場合は、当該外国語の担当者がその学生の能力を判定したうえで、その能力にみあった当該外国語の履修方法を指示する。

そのような学生は、４月のガイダンスで開催される語学相談会の折に、当該外国語の担当者に申し出ること。

◆ 経営学部の履修科目のなかに設けられている英語以外の外国語科目の履修方法

経営学部には、ドイツ語・フランス語・スペイン語および中国語のほかに、ロシア語、朝鮮語のそれぞれのⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの科目と、これら計６外国語の上級の科目が設けられている。

ロシア語、韓国語含む計６外国語を履修しようと思う学生は、これらの科目担当者に申し出て、履修についての指示を受けること。

〈健康科学〉

1. 健康科学Ⅰ・Ⅱについて

(1) 健康科学の目指すもの

健康科学は適切な身体運動を媒介として、将来必要とされる心身の能力を高めることを目標としており、特に目指していることは身体と運動の知識と理論についての理解と認識を深め、実技などの実践をとおして豊かな人間性を育成しようとするものである。

近代文明が、利便性、効率性を求めすぎて、生活の中で適宜な運動量が不足している今日、将来的には自らが積極的に運動する機会を求めて行かなければならないし、同時にそれらを生活設計の中に位置づけていく態度と能力が必要である。学生時代は、一生を支配する世界観やライフスタイルを樹立する大切な時期でもある。この時期に、健康と運動に関する知的理解を深め、道徳的に正しいことを判断し実践する精神力や豊かな心を育成することが重要である。この理念を遂行するために次の目標をあげる。

- ① 健康・体力の保持増進
- ② 将来の健康管理を行う能力を身につける
- ③ 身体運動（スポーツ）を通して社会生活の縮図を体験し、社会のニーズに対応できる精神的能力を身につける
- ④ 生涯学習の一環としての社会体育への接点の役割として学ぶ

(2) 「健康科学Ⅰ・Ⅱ」の内容

健康科学Ⅰ（1年次 前期 1単位）

- | | | | |
|----|-------------|----|---------------------|
| 理論 | ① 健康のとらえかた | 実技 | ① 健康診断 |
| | ② 体力論 | | ② 体力診断 |
| | ③ 身体機能と運動能力 | | ③ 運動能力テスト |
| | | | ④ 基礎体力の養成 |
| | | | ⑤ スポーツ種目を通した運動能力の養成 |

健康科学Ⅱ（1年次 後期 1単位）

- | | | | |
|----|---------------|----|-----------------------------------|
| 理論 | ① 体力測定の評価について | 実技 | ① トレーニングの処方と実際 |
| | ② トレーニングの理論 | | ② 適切な運動処方の実践 |
| | ③ 運動処方についての理論 | | ③ 各種スポーツ種目を応用しながら基礎体力および運動能力を養成する |

(3) 講義運営および成績評価

「健康科学Ⅰ・Ⅱ」の講義運営および成績評価の方法

- ① 授業には必ず指定された使用書（「健康科学」）を持参する。
- ② 学期当初から2回、上記の理論を講義し、その後実践的授業とする。
- ③ 理論と実践を通して各自の体格・体力・運動能力を評価し、将来に向けての運動処方を考える。
- ④ 健康科学Ⅰ・Ⅱの教材は陸上、体操、球技種目を採用し、トレーニングを含めた授業を展開する。
- ⑤ 学校体育演習を設定し、**教職課程専攻**^{注3)}学生を対象として、将来教職に就いたときの課外活動の指導方法および管理・運営等について学ぶ。
- ⑥ 特学コースを設定し、身体的疾病のため普通の授業に支障があると認められる者を対象として、現在の体力水準に合わせた運動量を処方しながら授業を展開する。
- ⑦ 成績評価については、**健康診断**^{注1)}ならびに**体力テスト**^{注2)}を受検し、総授業回数の3分の2以上出席した者が評価の対象となる。

健康科学は様々な評価基準が考えられるが、実践して効果を求める観点を重視する。さらに授業態度、教材に対する取り組みの姿勢なども考慮される。

(4) 受講における注意

- ① 授業に出席する場合は、運動に支障のない服装を用いること（ジーパンは厳禁）。
- ② 体育館を使用するクラスは、体育館シューズを使用すること。
- ③ 病気その他の理由によって欠席または見学・早退・遅刻する場合は、あらかじめ担当者に届けること。
- ④ 授業に出席した者は、担当者に必ず出席票を提出し出席印を求めること。
- ⑤ 指定されたクラスで履修すること。（学部別、男女別、教職課程専攻の有無別（男女合同））

注1) 健康診断について

健康診断は自己の発育発達の実態を把握し理解することと、疾病の早期発見に意義がある。また適切な運動量を処方するためには、医学的に評価された個人および集団の健康水準をもとにしなければならない。したがって健康科学を履修する者は必ず受診しなければならない。

注2) 体力テストについて

本学は学生の体力を把握するために、文部科学省スポーツテスト（運動能力テスト・体力診断）を実施している。各自が自己の体力について認識を深めると同時に、授業における運動処方の参考にする。健康科学を履修する者は必ず受検しなければならない。

注3) 教職課程履修者対象の健康科学

教員の仕事は多岐にわたるが、課外活動（クラブ活動など）の担当となった時のために、積極的に引き受ける心構えと知的準備が必要である。専門的経験が無くとも、教室以外で生徒達と一緒に時間を過ごすことで多くの発見や人間関係が構築されることは、学校内での教員としての価値を高めるだけでなく教員としての視野も広げてくれることとなる。従って、教職課程履修者は、「健康科学（学校体育演習）」と表記された時限を履修すべきである。

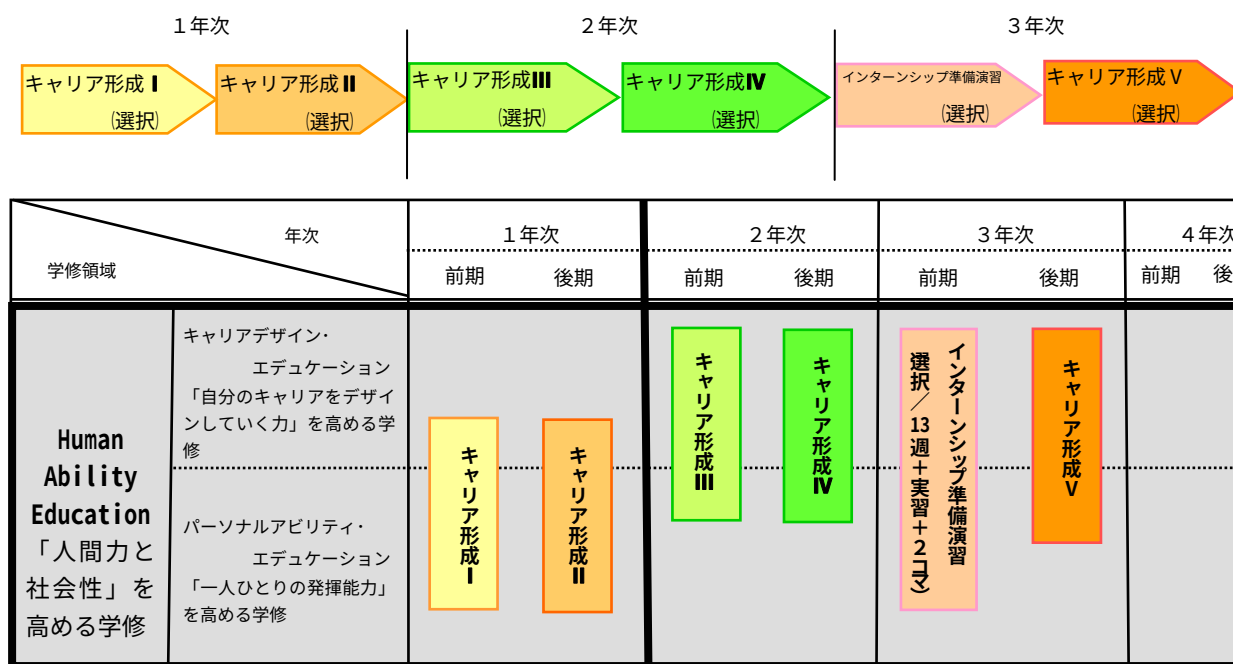
2. その他の体育関連科目

さらに、体育関連科目として、「生涯スポーツⅠ・Ⅱ」（ゴルフ、スキー、スノーボード、ウインドサーフィン等の集中授業含む）、「身体運動科学」「保健衛生論」「栄養学」「スポーツマンシップ論」等の科目が配置されている。これらは上記「健康科学」を履修した上で、自他の健康管理の能力を高め、さらに社会におけるスポーツ文化の形成と継承に貢献できる人材づくりを目指した科目である。

なお、これらの科目の授業内容、履修方法等については、経営学部のシラバスを参照のこと。

〈キャリア形成科目〉

キャリア形成科目は、1年次から3年次までを対象として開講されている科目です。下の図のように、キャリア形成に必要なテーマを、年次毎にステップアップする形で配しています。



雇用環境は、これまでの堅調な動きから一転、世界的な景気動向の影響に左右される” 堅調～鈍化の波が短期間のタームで変動する” 不安定状況になっています。経済の鈍化を背景に、業績不振、それに伴う雇用調整が行われつつあること、団塊世代の大量退職後の新卒補充が折り返したことで等々により、消極的な採用環境へと変化しつつあるのです。このような社会状況下では、企業は、より採用基準を厳しくし「少数精鋭の視点で、高い人材要件を求める」傾向を強めます。学生側としては、より豊かな人生を送る上で、そしてその第一歩を踏み出す就職活動のうえで、一層の“自己形成・キャリア形成”が大切になってきます。そのためにはまず、基盤となる“人間力”を十分に醸成し高めていく努力が必要になるでしょう。

社会では、求める社会人像として「生き方・仕事に対する目的意識が明確で自己成長に意欲的であること」が重要視されています。やりたいことに向かって行動し努力できるか、協調し切磋琢磨することができるか、体験から学ぶ力はあるか・・・等々のことが重要視されるわけですが、これはまさに「自分、将来、他者、仕事、成長といったことに真摯に向き合うことのできる力」を求めているのです。本来的なキャリア形成とは、よい職を得てキャリアを作るために必要な要素という狭義のことではなく、この「自分、将来、他者、仕事、成長といったことに主体的に向き合うことのできる力を作る」という、生きる力の根幹となる考え方にほかならないのです。そのような観点で大学生活を考えた時、4年間のキャンパス生活で「自分の進路を見出すこと」と「社会に価値を寄与する力を高めること」が、大きな目標になることは間違いありません。「キャリア形成科目」は、このような各人それぞれの進路の先にある社会生活で必要となる考え方や能力を習得するために設けられている科目で、本学の「成長支援第一主義」教育の一翼を担うものです。

その目的を、より具体的に示すと次のようなものになります。

1. 自分に期待し、自分の将来を展望できる力を養う
2. 大学生活を、自分の力で、価値あるもの・充実したものにできる力を養う
3. 大学生として、社会の一員として必要な「5つの力＝自己発見力、自己実現力、問題解決力、対人関係力、自己表現力」を養う
4. リアリティのある進路・職業観を形成する

このような目的を達成するために「キャリア形成科目」は、1年次から3年次後期まで“各学年次にやるべきこと”を、ステップアップしながら履修していけるように、「キャリア形成Ⅰ」、「キャリア形成Ⅱ」、「キャリア形成Ⅲ」、「キャリア形成Ⅳ」、「キャリア形成Ⅴ」、「インターンシップ準備演習」という科目で構成しています。

なお、履修にあたっては、「キャリア形成Ⅰ」から順に履修することが望ましいのですが、どのキャリア科目からも履

修は可能となっています（ただし、下位年次の学生が上位年次の科目を履修することはできません）。

（１）キャリア形成Ⅰ

１年次前期に開講する「キャリア形成Ⅰ」は、以降に開講する「キャリア形成Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ」の導入部として、大学生から社会人へ自己成長するための最も必要な基礎過程となっています。

「キャリア形成Ⅰ」の学修目的は、“自己発見力とポジティブ思考の形成”です。

ここで言う基礎過程とは、高校生から大学生への意識転換ということにとどまらず「これからの自分を作るために、本来の自分の良さや自分らしさを発見し直す」ことを意味しています。自分がどんな人間なのか分からない、やりたいことが分からない、自分との向き合い方が分からない……。あるいは、自分の良さや好きなところ、武器にしたい長所などをさらに伸ばすにはどうしたらいいのか。いずれの視点であっても、この１年次の時に「気づく（見つける）」ことがとても大切なのです。

その意味で、この「自分への新たな気づき（自分探し）」こそが、キャリア形成の最も重要なファクターであり第一歩であると言えるのです。

さらに、「ポジティブ思考（肯定的・前向きな考え方）ができるようになる」ことが、重要な目的になります。「ポジティブであること」は、将来どのような進路を歩むかにかかわらず社会に出た瞬間から必要条件として求められ、さらには人生の道程をも左右する要件です。短所と決め付けていること、できないと思い込んでいること、あきらめていること、苦手意識、目的をもてない……。等といったネガティブな部分をポジティブに変えることこそが、大学生活やそれ以降の社会人生活全般を充実させ自己成長していく鍵になるのです。「キャリア形成Ⅰ」は、大学生活のスタート時点で取り組んでほしい二つの重要事項に対する“考え方と取り組み方”を学びますので、できるだけ多くの学生の履修を望みます。

（２）キャリア形成Ⅱ

１年次後期に開講する「キャリア形成Ⅱ」の学修目的は、“自己実現力の形成”です。

大学生活を半年以上過ごしたうえで「自分」をより深く見つけ、「自分の能力を引き出す考え方を習得し、“成りたい自分に成る（自己実現）力”を高める」ことに取り組みます。

「人間としての根幹的な力、対人コミュニケーション力、自己実現に至るプロセス構築力」について、具体的に、かつ実践的に学びます。

「キャリア形成Ⅱ」は、「キャリア形成Ⅰ」を通じて見つけた自分の良さを、将来の進路に結びつける力とするためのブリッジになる内容であり、同時に、大学生活の集大成である就職活動時に求められる「人間力」を向上させるものでもありますので、できるだけ「キャリア形成Ⅰ」から継続した履修を望みます。

（３）キャリア形成Ⅲ

２年次前期に開講する「キャリア形成Ⅲ」の学修目的は、“職業観の形成”です。

自分の興味関心や職業観を「具体的な仕事に関係付けしていく」ことに取り組みます。

どのような仕事があるのか？ 業種業界とはどういうものなのか？ 企業に入った後はどのようにキャリアを積んでいくものなのか？ また、大学で学ぶことと仕事とはどのように関連するのか、社会で活かされるのか？ 業界研究はどのようなしたらいいのか？ そのようなことを幅広く考察しながら、自分の関心に沿った仕事について詳しく学んでいきます。

「入社後３年間で、３割もの若者が辞めていく」という現象が社会問題化していますが、この主な原因は「ミスマッチ」であると言われています。ミスマッチとは「イメージしていた仕事、会社と現実とのギャップ」、つまり「こんなはずじゃなかった……」ということです。せっかく仕事に就いたにもかかわらず、２～３年（キャリアとなるには短かすぎる期間）で辞めてしまうことは、本人にとっても企業にとっても不幸なことと言わざるを得ません。

このミスマッチ現象を払拭するには、下記の事項が不可欠です。

- ・ 憧れや知名度などのイメージだけに固執するのではなく、「幅広い選択肢と選拓眼」を持つこと
- ・ できるだけ「やりたい仕事を具体的にする」こと
- ・ 「自分はなぜこの仕事をやりたいのか、をしっかりと意味づける」こと
- ・ やりたい仕事（及び業界）のことを、できるだけ「リアリティをもって理解する」こと
- ・ 「比較検討、取捨選択できる手法を身につける」こと

このような必要事項を習得することが、「キャリア形成Ⅲ」の目的です。キャリア形成Ⅰ・Ⅱの履修有無にかかわらず、できるだけ多くの学生の履修を望みます（ただし、１年次生は履修することができません）。

(4) キャリア形成Ⅳ

2年次後期に開講する「キャリア形成Ⅳ」の学修目的は、“問題解決力の形成・向上”です。

特にこのプログラムでは、下記の2つの能力について習得・向上を目指します。

- ・問題解決力
- ・論理的思考力

昨今のような変化の激しい社会状況においては、様々な問題事象が起こり得ます。企業活動においても、問題に直面する場面は多く、その際には全力で問題に向き合い解決・克服していかなければなりません。そのため、とりわけ問題解決力は重要視されており、新入社員の資質条件としても重要視されています。

また、論理的思考力も、職務遂行・問題解決・成果創出の基礎資質として、業種・職種にかかわらず重要視されています。

「キャリア形成Ⅳ」では、この2つの重要な能力要件の向上を図るために、必要な事柄を、実践的なトレーニング・スタイルを用いて学び、向上を図ります。来るべき就職活動にも大いに役立つ内容ですので、できるだけ「キャリア形成Ⅲ」から継続した履修を望みます（ただし、1年次生は履修することができません）。

(5) キャリア形成Ⅴ

3年次後期に実施する「キャリア形成Ⅴ」の学修目的は、“自己表現・プレゼンテーション力の向上”です。

自己表現する力は、コミュニケーション・対人関係の核をなす点で、発揮能力の最たるものであると言えます。それによって意思疎通が図られ、相互の理解・納得が得られる、最も重要な能力要件です。3年次は“社会と大学の接合を具体化（＝進路・就職実現）”する最も重要な時期となるため、特にプレゼンテーション力の向上を中心に、実践的なトレーニングを行ないます。また、論理的に考え社会的視野を伴った自己表現をできるようにするため“新聞を読みこなしていく力”も養います。

「キャリア形成Ⅳ」と連続して受講することで、“論理的で自己表現が豊かな、より円滑な対人関係が作れる力”の習得・向上が図れます。

キャリア形成Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの履修有無にかかわらず、できるだけ多くの学生の履修を望みます（ただし、1・2年次生は履修することができません）。

(6) インターンシップ準備演習（国内実習、海外実習）

「インターンシップ」のための、事前研修プログラムです。「インターンシップ準備演習」の学修目的は“企業体験で必要となる実践力・発揮能力の向上”です。

近年、インターンシップは、通常の授業では体験できない「企業活動や職場の実態」「仕事の現実」などをリアルに体験できる非常に有意義な機会として、学生・企業双方から注目されているものです。

また、「海外インターンシップ研修」に参加する学生を対象に、別途「海外インターンシップ・クラス」を設置しています（横浜キャンパス・湘南ひらつかキャンパス双方に設置）。海外ビジネスキャリアが豊富な講師による、海外企業オフィスでの実際の英語の使い方、日本と海外でのワークスタイルや慣習の違い、マナー・コミュニケーションスタイルの習得、受付・店舗等での接客接遇の仕方、電話対応・伝言・報告の仕方等々を、実際のオフィスシーンを想定しながらトレーニングし身に付けていきます。また、英文履歴書の書き方も指導します。

なお、この授業は、国内・海外共に、「インターンシップ準備演習の履修と夏期休暇中に行われるインターンシップに参加し、かつ報告書の提出と報告会での報告を行うこと」で単位認定が成されます。プレゼンテーション力や問題解決力を向上させたい、または、十分な時間をかけて事前準備にとりくみたいインターンシップ参加予定者は、この準備演習を大いに利用してください（ただし、1・2年次生は履修することができません）。